ZOCALO 2016 12 ▸ 2017 1

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

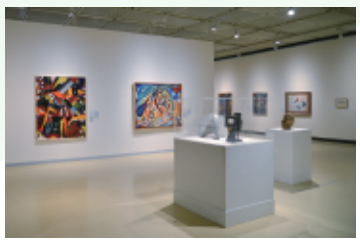
日本におけるキュビスム ピカソ・インパクト

2016年11月23日（水・祝）～2017年1月29日（日）

「日本におけるキュビスム」は三年越しに準備した展覧会です。最初の会議は2013年の11月。初めの会議に出席した五つの美術館のうち、三つの館が最後まで残り、15回に及ぶ会議を重ねて企画を進めました。関係者の怠惰もあったとはいえ、かくも時間をかけて一つの展覧会を準備することができたことは大変楽しい経験でした。この展覧会はあらかじめ価値の確定した作品を展示するのではなく、展覧会を通して作品に新しい文脈を与える試みです。このような読解がどの程度妥当であるかについては、来場者の判断を待ちたいと思いますが、入場者数や収益のみが美術館の存在理由とされる時代に、地方のさほど豊かでもない美術館博物館三館が協力して、このようなチャレンジングな展覧会を開催できたことを誇りに感じます。

尾崎信一郎（鳥取県立博物館 副館長）

巡回展 第一会場の 鳥取県立博物館 より



鳥取県立博物館の展示風景

ピカソが聞く！ 尾崎信一郎×P. ピカソ

Interview by P. Picasso

zocalo前号ではパロディ・ピカソ氏（以下P.P.）にお話をお聞きしましたが、今回はピカソ氏から尾崎氏（以下S.O.）がスペシャルインタビューを受けることになりました。

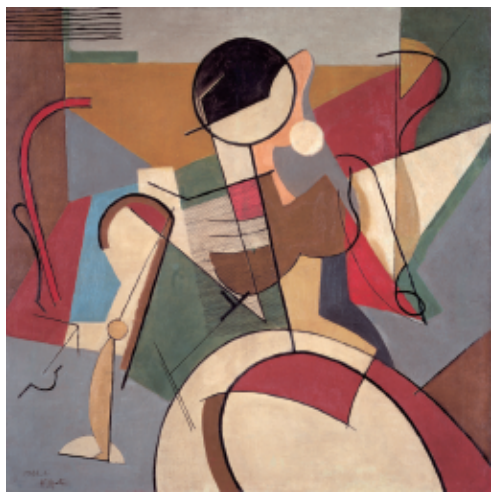
（P.P.） 美術の歴史に革命を起こしたと言われるわしのキュビスムは、日本では最初どのような作家の間に広まったのじゃ？

（S.O.） ピカソさんたちが始めたキュビスムが日本へ伝えられたのは、1910年代から20年代にかけてのこと。キュビスムに初めて本格的にチャレンジした萬鐵五郎、パリに留学していた東郷青児らが知られています。また、同時代に海外に滞在していた田中保や久米民十郎などは、前衛芸術を肌で感じながらキュビスム的な作品を生み出しました。

（P.P.） ふむ、キュビスムはメッツアンジェやグレーズなど多くのヨーロッパの前衛画家を虜にしたが、わしや彼らのキュビスムは、日本でも注目されたようじゃな。

（S.O.） 1920年代に入ると、フランスに留学してキュビストに直接教えを受けた矢部友衛、川口軌外らが登場します。また、独自にキュビスムを消化した坂田一男や今西中通は、日本におけるキュビスムの展開をたどる上で重要な存在といえるでしょう。さらに村山知義、柳瀬正夢、河辺昌久など未来派や構成主義と関わりが強い作家もまた、キュビスムを意識しつつ新興美術運動を推進していきました。しかし、ほとんどの画家は、ひとときの実験期を終えるとキュビスムを離れてしまいました。フォーヴィスムやシュルレアリスムと比べ、キュビスムは日本の画家によって深められることがなかったといえます。

（P.P.） なるほどのう。わしもキュビスムにいったん熱中したが、その後古典主義やシュルレアリスムなどの表現にも興味を持ったものじゃ。《ゲルニカ》などの表現はその結果生まれたものである。その後、日本ではどうなったのじゃ？



尾形亀之助《化粧》1922年

（S.O.） ひとたび姿を消したキュビスムですが、戦後に再び影響が見られるようになります。その傾向をいっそう強めたのが、1951年に東京と大阪で開かれたピカソさんの展覧会でした。1950年代前半、ピカソさんは日本の美術界に大きな衝撃を与え、その影響は洋画のみならず、日本画や彫刻、工芸といったジャンルにまで及んでいます。多くの作家がキュビスムの手法を取り入れながら、様々な主題の作品を制作しました。

（P.P.） キュビスムが二度にわたって日本の作家たちに受容された、というのはなかなか興味深いのう。わしが生きた時代の日本の美術について、今までとは違った見方ができそうじゃ。

（翻訳 I.H.）

MOMASコレクションⅢ

特集展示：橋本真之《果実の中の木もれ陽》これまで／これから

2016年10月22日（土）～2017年1月15日（日）

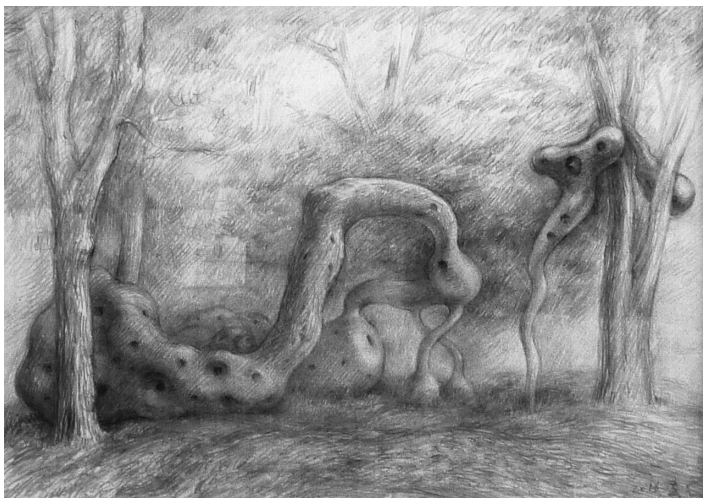
北浦和公園に設置された人気作品、橋本真之《果実の中の木もれ陽》の16年ぶりの増殖が、この秋、作家の公開制作によりいよいよ実現することになりました。本号をご覧になる11月末ごろには、《果実の中の木もれ陽》は大きな成長を遂げていることでしょう。この公開制作に先立ち、MOMASコレクションの特集展示「橋本真之《果実の中の木もれ陽》これまで／これから」も10月22日にオープンしています。この日、橋本さんをお迎えしてアーティスト・トークを実施し、1階展示室やギャラリーに展示された作品を前にご本人に語っていただきました。橋本さんが今夏に上梓した著書の出版記念パーティーが有志により予定されてこともあり、トークは70名を超える聴衆で大盛況となりました。

今回で3回目の増殖となる《果実の中の木もれ陽》と当館との関わりの直接的なルーツを探ってみると、1985年に「現代美術の祭典」で北浦和公園に展示された《秋の陽の悦楽に》という作品に行きあたります。夏を通じて汗みずくになって制作している日々、突然ふっと作業が楽になっていることに気づく日。そんな悦ばしい秋の訪れの感覚がこの作品のタイトルの由来だったそうです。1987年には、初めて《果実の中の木もれ陽》と称して木の股にかけて作品が展示されました。それらの作品が増殖・成長して、1996年における当館での最初の購入・設置に至ることになります。1998年、2000年と順調に増殖したのち、厳しい財政状況を受けてなかなか再度の増殖の機会を得られずにいましたが、晴れて16年ぶりの増殖が実現する運びとなりました。橋本作品を高く評価した第2代館長・田中幸人（1937－2004）の英断により、20年間に亘る作品の増殖・成長のレールが敷かれたことを考えると、増殖の準備やお手伝いをしながら「橋本番」として身が引き締まる思いでした。《果実の中の木もれ陽》は、彫刻洗浄ボランティア主催のワークショップ「彫刻あらいぐま」で子どもたちと洗浄する定番作品でもあり、いまや当館を語るには欠かすことのできない作品となっています。

橋本真之 スペシャル・トーク（2016.10.22）
作品を前に語る橋本氏

2000年以来 16年ぶりの増殖！ 橋本真之《果実の中の木もれ陽》

作品タイトルからも読み取られるように、当館の作品は東京国立近代美術館工芸館所蔵の《果樹園―果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》（1978－1988）から枝分かれしたものですが、工芸館の作品にはない特徴を2点備えています。第1の特徴は、「周囲の植生に呼応して増殖する」というコンセプトが明確であること。芝の上というニュートラルな空間にある工芸館の作品と比べると、当館の作品には植生との強い一体感が感じられます。



《果実の中の木もれ陽》増殖予想図（北側の眺め）2016年 作家蔵
右の木の股にかかる部分と、画面中央から左手前に伸びている部分が今回増殖する部分

今回、隣接する木の股に作品が設置されたり、2本の木のあいだに作品の一部が進出したりすることで、将来の木の成長につれて、作品の姿や見え方が変化していく可能性をより強くはらむことになります。第2の特徴は、当館が「増殖」のコンセプトを評価し、作家の制作活動に寄り添いながら継続的に購入してきたこと。出来上がった作品を単に購入するのではなく、作品の成長につれて予算を投じていく当館の姿勢は、公立館として他とは一線を画しています。

MOMASコレクションの特集展示「橋本真之《果実の中の木もれ陽》これまで／これから」では、2003、2016年の両年度に作家から寄贈された関連ドローイングをはじめ、2度の増殖の様子を記録した映像や写真も展示して、作品の成長の軌跡をたどっています。増殖して新しいかたちを得た《果実の中の木もれ陽》、館内の特集展示、そして橋本さんの著書をあわせてご覧いただき、この機会に橋本真之の造形世界を深く楽しく堪能してください。（T.S.）

夕映えの《果実の中の木もれ陽》（2016年夏、南東側の眺め）
長年親しんできたこのかたちも見納めとなります

橋本真之著
『造形的自己変革－素材・身体・造形思考』
ミュージアム・ショップで絶賛販売中！

はみだしソカロ 019 「竹岡雄二 台座から空間へ」を鑑賞しました。広い展示室に台座が何個か置いてある空間は何とも贅沢な空間でした。他の展覧会では得られない安息感を得ました。（ごっとごとちゃん・20歳・女性）

はみだしソカロ 020 エジプトの作家がつくった作品を観た。ことばも、食べてきたものも、目にしてきた風景も違うのに、作品を観て、たぶん作者と同じ気持ちになれた。これが芸術の役割なんだな。（万葉・27歳・女性）